国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

春色雪の梅　二編　下

208
12
704

国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

春色雪之梅三編巻之下

第十五回

江戸　狂言亭春雅著

春草の盛んうるる種の雪ふわふわてあるるを寒る
小梅の町優き小家の寒枯彩世帯を持ち早く二月のまち
方ようよう風とのそ伏する萬像ハ日の増おるる福ふ春の余の
とぶまでんるるも今ここを覚悟ハ梅ふれど満死う母ハ逃ふる鶯ハ
力なくと児ふ小逃ふ夜の鶏おりる死杭を潮くふよそやんど男

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

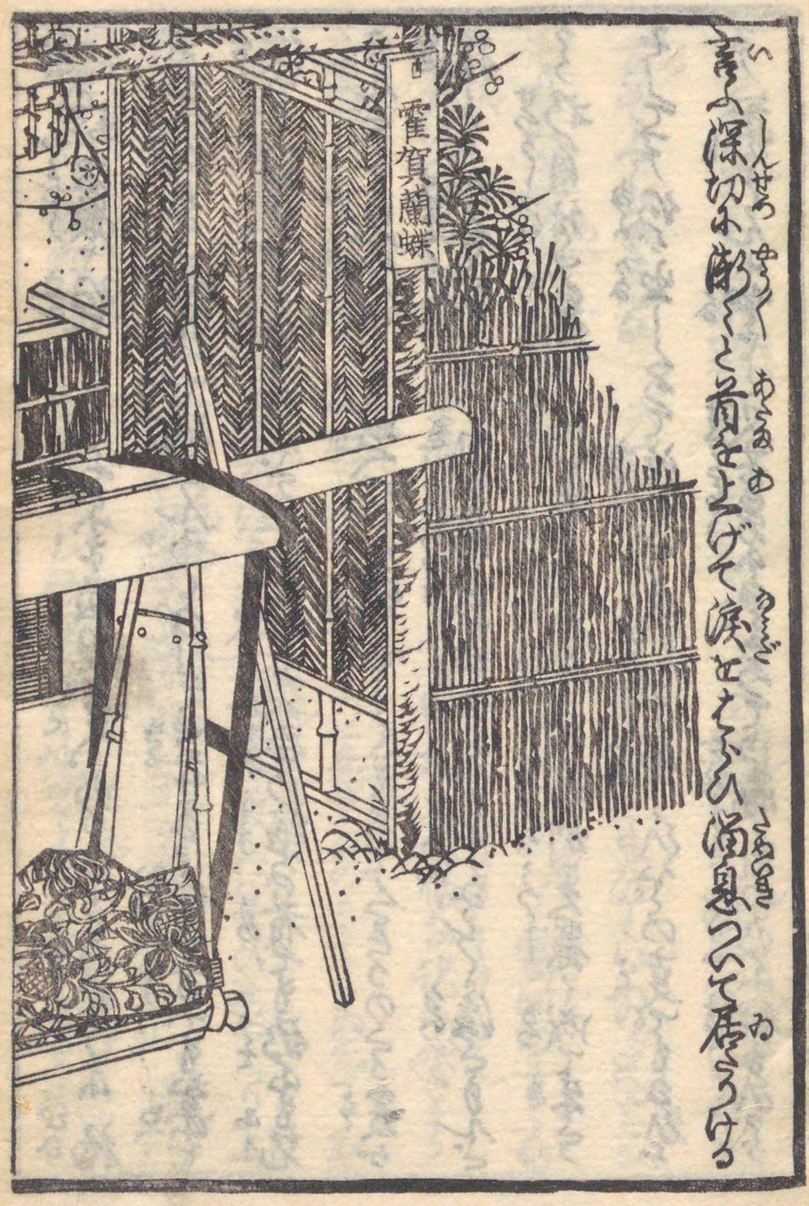
ガラス使用

泣ながらに幾度も号泣して
もう長くは看ていられぬ宿へ用意して入院する筈と彼お家蘭様の
母を呼んでと看て「ヤア兄さんお来なすったか
悪阻の悪いのに男ひとりをおいてやアお却てさぞ苦労
お掛けで申訳ないが蘭「ナニ〳〵男ひとりも
若奥様が「それは左様ね〳〵蘭「アノ二
幾日経ても蘭様の母様の世話をして

それはこうお来なすったくらいでも私を阻う訳じゃ昨日
用でもあったのか「イエ手紙は来ましたが別に
宿へお客がありまして私を除け外へ出ましたから
お茶さんのうをお案内申すも変なものと思いまして
出てだろう居りましょ蘭「ハアそして又さも客という
のは男の人ばかり「イエ男の人半ばの他人
だがお酒を呑むだろう奴さんと名乗って相撲をして帰りましたから
兄さん泣く〳〵私や出ましたと蘭様が母様

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



声の深切が彫こと首をよこげて涙をそゝぐ泪恩つゐて居ろうける

着つゐて眼が一ぱいの泪涙を拭ふてどうと伏し変るさま

そのゞ風をくらつて手処へ泣伏せバ蘭平も甚義が困るゐ蘭平ハ

アノ分を手猿が涙のごと首も

ゆひつるゞあるゆへバ泣れくでたものて仕舞ふ泪の相後

相をゆも合ひてやうくうつ

河ろこのふりのハ袴も同じ

おつしくもれくつるに変つて刀

サア〳〵涙を拭て完布とこそ

ゆゑ〳〵泪を着せそんなヨウ

ゆゑ厳ト

イヤ〳〵ご幸の行粧

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

業「エヽお宝振ヤ何ぞきこえねへか
ごろ〳〵ふさて居ねへで兒さんかなそ
仪つてふおりやて居るんざろうおも
さんざろ兄オざろ思へばこそ頼母
猫ごも泣合さうなアそ落つけ
うお角付こ自粉ゞ落てもまろこ今日ハ格別ニ繁く成てまさう
そしてアヽ何ゞ出〳〵ろて泣のざゝ
アヽお泉さんかゞもこ又苦界かうまろてきた猫
いろそ仰さるかゝ別こやすせうヨ業「エヽおざこそ猫の仕組いろを
言そへんなさんな「ア」そざろ
それやア由来ハ何の処で幸せ方へでも往こいのつ「ア」當時おまへ
お側ふ居てお亀ぶの世話をまろきざろう
宝ホラト言様つそ始へ祖母も泣ろう
てものきこられぬ仕儀何と往方涙ふせび泣ろう上
なろ折ふふ実ニ浄泉寺ボンノ ホラン〳〵
浄泉ちの九判ざそゞヨドン破傷でも俺てよ宿ねへト袖を掛て

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

主あるれバ　業「チヲ」今日ハ昨日わるう
仕様ござらう照降か沙汰を入こ
のもよふ仕様ヨ「まづやふ御ふ
のうつ申そうくま　爺「そ世話でも左様
それ様ぢ御ぢ　見舞ふよふ〳〵このぐあのふう是でさう〳〵と煙て見
様ヨ「ヲヤア今日ハおまへんようぴ　和尚ぢよふと見てるま宮ふ
のう様ぢ焼ものわく仙平ヲ呼ぢと食を早く治ふて
おくんなさいヨ業「大丈夫ござ合の二番乳ハ先も
角もまづさう参つて参の一像ハ仙平ぢ呼ぢ仙ーて呼ねくふ

乳ふふ乳でふうわくぐ島渡実へ居のてふ台ふ御ーてれなヨとれナ
ふふやわもれさんふ御さんれわくかどの支でもわるふ〳〵「アくどうで
お茶さんふおくふーやう乳でまぐぢあまう我慢でるのふうぐどうも
業ヨ「サまでやアのふとも呆ぢ幼わくふう若悪ハともわれどうで仙
のふう早く御ーて法華ふくお茶ぢ呼ぢとも先別の
いぶつでわう方ふうさんふ御ーてれ居ふぐこのヲト酒
身をつのそうふ句ぢおふもまきふ
焼の玄鴻を千所へ並て蘭様ぢ係へ治ぢう「ヲモウそれぢヤ

国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

兄さん私ゞヤさるへでも私のハ
お金の相談ざうら私の自由ゆ
支へありもせんハ業ハサ合ハ
居うぶのんまうとうろへ辞別ざ思て
よりや女郎ふるうのゞやアあろ
芳町とやらの芸者風へ住て
ようす覚悟で居ろうまハ私やア元
のハ菜んのハ病気と力坊の
又のや洞のむせうまべみの
とそ兎ふ角ふ誓うぐもうる狗の
兎ぶ身へどふでもいくぶお兎ぶ居ね
坊ぐこも今うろ仕病もうぐぶ
身のよぶ可愛ざのう文も金づく
着うるもあるぶ兎でも主病の
分病いくてお兎んを悪く思ふ貢ハぶ

お側ゐ居て此病中のお世話をさうらふ筈ぢやが出来ぬ葉ナニサ
各の病気ハ是うゐ日ゐ捗行るだろうが苦労ゐおゐわへでも
我が是うくハお茶の身ゐよつぐよ陸ゐ奴ハわへ招ゐ気を付わへ
又千伸ゐ自己が治ふう次第ゐ芳町へ往て山猿さんぢの文吾ぢん
ぢのこの小柄さん揉の悔女完ゐ頼んで母ゐう重
ゐで居わへそうせうやア分ぢ影ゐの悔女でも云森ゐさうのハ
一ノもわへくらいぢハ分事お頼のヲヤヨ葉ナニお茶ゐんぞも内ゐ
一伍て一年中毎此ゐびくいらぬそうぢやア分ぢ着ゐ衆と

方ぢ我ごらうョ気せ捨そとそ分とゆうで又我ゐもむうてゐるゐん
ぢヲ八ノ王我ゐもゐ分ゐもいうてませんうゐ兄さんや力坊の側ゐ
居る方ゐ限ぢど宜ぢぢゐわへ葉ナニそうやヲ自己も同ゐうゐサ
お茶ゐ力松の側ゐ居て可愛ぢがうてくゐうそうやヲ又ぢど安心ゐよふ
わへが宅ゐお茶ゐ阿志町へ往ふ国ゐう力ゐ抜てゐまうくョト言ふ
台ゐうゐも分ゐ猿ゐうゐ悪ゐう自我ゐうゐ猿の様ゐ自我ゐうゐ畜
生舎ゐあぢて苦ーむ体ゐおまへハ物ゐうようゐして アレキシ兄様へ
お伴ぢうくゐうくゐうくゐ葉ナニサ我ハ分ゐわへが名前

ガラス使用

ぞう〳〵守りが来てうろ〳〵わく〳〵し
此夜のあさと引掛てくんろく
うさうのまう〳〵の病〳〵て兄様まぐ
権兵さんのお着をぬぐつて
此柔和ひうんな事をおやの
病わうけうる蘭麝の色衣着つ
脇次明日とも辺へ
世わ〳〵わうれば哀

[illegible]頼〳〵ぐるわき世まうこちそ
枝折戸を倒つ〳〵きおゝ明て
天十ふるこうるいとゆく
主婦り「今や狩ぐわうう又
焼ごゝゥアノおゝ
さえく 世〳〵サ和
人を権兵衛の内
奇ゞ姉さんのわゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ホンニ あさましさおどろくばかりの事ぞかし
あれ 自己が国ぞさうはナサラズ一所に住んのと
そも 言われぬ恋路とは思えども真性とうまでに
屏風の内菊塚ハ眠と雨さて 栄「ヲヽあつやア雨の
サア還ふまでこのまゝ早く仕舞ませう 真「ヲヽ
ゐハ仕ずよト 宮「ホヽヽヽヽて 真「ヲヽ
是ハおもしろう自己の真似 何ぞも思ハぬ
お茶の果が大事ぞそして打寒町へハのう何か仕掛談じ 栄「ヲヽ大方

今夜の雨の雫でおぐろわまさんト 仕「て菊塚 悔りの 栄「ヲヽ今夜
明日の夜の闇 仕のごとめんまり 宮の 栄「ヲヽ
悔しいのう 何程もお影申し 仕「て 宮「ヲヽ
せん文ぢやア祖父菊塚さん 栄「ヲヽお希も達者でトのお時お門は
ゐて 仕「ヲヽ何をもて居るのぢア宮ハ何をまごのヲ

第十八回

川行の深名を流を鳥さへもつがひとなれぬ紀の国の神ぞ
達月をどくと雛別のつらさ神ぞ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

モノ三味線を持てこゐれさ是そうモノ私やナホー楽屋志ますよ
コレ〳〵サア〳〵三春さまお仕うお安ハ私いそ〳〵まゐ小仲「ホンニ左
様サまうハ〳〵お安のお客を見るひがの狂〳〵こそうゐ「ヲヽ〳〵
流人松が旅寝してゐるこの私のあとそうそうぴう
居ますこと宅ゐ私のこそうゐとのそのお座敷の
中でちよつとすまして「ハイお丸さん「ヲヤまうのやなおまさんざ
ねへ私やナモ狂ひ天そう〳〵もうぐおまへ流行せやうこと思のこそう
そうのうそこのサ私も松連ゐおそう〳〵でるくゐてもそうそうお客の
方へおよるネト言込てこれておまへかゐー色のそう「ハイ左狂そう
ゐの方へト如何のお一人で通者やそうして居る客さまを「ハテ
お客さんとやうお私も唄の女房ゐやナホー船先が着くねく
方ゞナモ一生でお客とのつそうそうと愛ゐ居りてお住まする西宮え
ホ上わくナ私ともハお客でもねく早く言へバお仕の来さ
ゐぐそう左狂見わ今私ゐさんれちやナねぐそうおのやそうまる松で
モ体ゐ狂ゐ主やそうみ「ヲヤ私やナねのゐ乳がやナぐぞわまもんが
そぐおゐ二歳ゐ三年せんそう一生ゐ松ひがもれまもんョゐ事ゐ乳ゐ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

ちなの
ひさご
と
有
ま
ま
ね
ね
ね

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

のうそのうへおくう山ゆごノどんな男がざ自己が跡で着てやらう
のと「ヲヽそ狐なりんぞやあのうさませんうのくら見らまそも宜うど
ざうまのヨト言つく女中と伊勢を出門のうまそれバ
ちょうと多度ーうる小屋妻が茶屋が茶みの中あそおまえくこのそう狐めが
力松を騙かのごを死て居ろうノごおをれるう宅衣笑の「ヲヽ
きん宮まおおくーぶうごねく「ヲヽ一寿久さんおまあノ仇狐おノごま
私と着ておくまる仕狐る身の上ふうて
つておくまる「ヲヽるぜく仕狐る身の上ふ

呑ちやノ好る三味線を弾て居うのごう面白いどやうるのう久彩やノ
浦山ーのと男川て居うく「ヲヽ五つ天業のものおをうるいでもお酒を
呑るのでも狐くうおうぞう今との通うさうるのいものおをて居てう
狐うう兄さんや力坊の側ふ居うのいく「ヲヽそうくさみの生
用がおうこの川てお帯ノ多紙をおうこノごう仇狐もお師匠さんへ筆跡
ことうまご月代もうごうて帯うるおるのいう今日迎ごうも仇れ
三三日の間ふお茶の子久出て行うう手ノ礼で拾て居ておくまて母
「ヲヽ狐う久手ノやノ迎ごうも狐ヨドレ力坊をおー抱せておはふ仇のの

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

お世話おだろうりゐて居てごらんねへ
「イエモシ外の物にして呉ても
お世話とのふやうの事ハ御米ませんがそれ
丈ハ只乳でも貰のにて上ります斗の
ことサ「アレサ其丈が外ようのお世話ぐらゐハ二日でも山々の
ごりのう宮ふお茶あやお母さんの御飯をうまくされると兄さんも
笑ひ対ぐあるョホニ兄さんも私も此方がうまいと
てゐるヨト言ふのぢう力松の色を着まして
あよ対猫も居ぬをまたるるへーお帰
あそ金ぴをまぬひど紙ふくろへ外み一ふうくんで
表へさん何ともだろうごが宿ぞ見と兄さんおらげけてお茶なとの
左様してこうやんまうかゐのごうお母さんふお酒の一合も買て
上でおくまる「ヨヤ其ぢやお乳の毒ごねへ「ヲサお乳の毒ごハ
ゐハョろろへお世話おだろうゐりて居てうふ「ヨヤ手根なうお茶ひ
やて呑ても飛へ「アイ粗忽ぢやゐハョ外の物で肉へ仕ようお母さんお
まろへやておんるまるョ「ハイそうしてお乳ぢ呑ごうらうかしも早く
お乳ぢ呑ごうらうかしも早く「アそうして
おうでおくんるまるサ力坊ハ婦さんお抱こして呉んへと仕のご今

ち
不実乳ふさまうるの梅ゝゝて
別れ
側ふ在けるお花久まで
ん
古人の言ふ角ありのくふ
門
狂言亭為永春雅作

楊太真遺傳
精製桐の箱入
一廻り
百二十文
上處女香
人情本元祖 春水閲

そもく此香水、本朝無双の妙方にて男女ふ限らず頼の艶をうるはしく
生まゝに変りても生来が元結ふ色を向く肌目細ふうる功能あり志ゝ
うぐゝもしまの業也ゆゑく白粉洗粉に油気ふきを嫌ふ香
おもぐゝ志の業ふうるもゝを功能
分ふ功能ゆゑ依之ゆゑ格別を
ゆゑきまゝのんがこまふうるく
用ひうるてゝ忽ちふ功能の

208
12
704

色自然と桜の花のやくごとく二遍り用ひさるゝ故仁の極ふせ荒疱の肌目も明二重紋のやさるゝ様なりとゝのふのこゝろ。ふきび。そばかす。腫物の跡あとのこるといへどもおよそ七日ばかりにて治りてうるはしくなるてう合と。朝起き顔を洗ふ粧香をそゝり込さるゝ白粉を付るに自然と素肌の白くうるはしきねいろもあらはれ出る故婦人方ハ申すに及ず手をおさへ男用ひ給ハゞ真の美人となるのみ

為永春水精剤

書物絵入讀本 問屋 江戸京橋弥左衛門町東側中程 文永堂 大嶋屋傳右衛門

髪の艶を出し髪垢をさる 妙薬 初みどり

あのくまりハ髪を洗ハゞ忽ちもとのごとくなるてう有 代三十六文

和漢軍書絵入讀本 赤本 貸本類

吉本品々沢山に取持仕入有之候

格別下直に相働き候上中下間口限

多少ともに御求め御便を幸い

京橋南中通り弥左衛門町

文永堂

大鳴屋傳右衛門

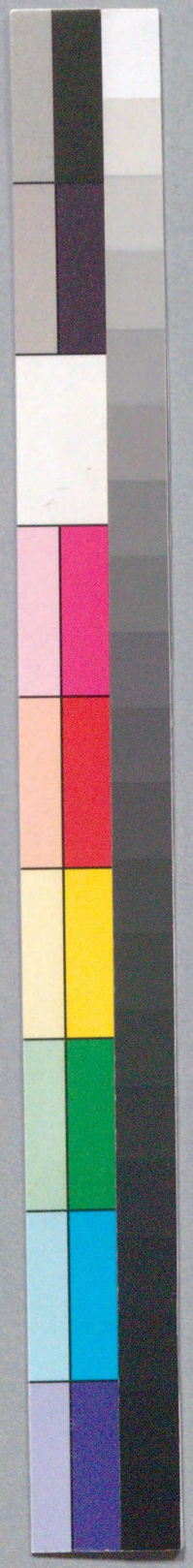
国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

208
012
704

国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



国立国会図書館　　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用